

今年も、もう師走・・・

仲嶺 真弓

今年もあつという間に時が過ぎ、早くも師走です。12月に入ると清水寺での今年の漢字一文字が発表されます。1995年から始まった、日本漢字能力検定協会のキャンペーンである催しですが、毎年の風物詩となり、私自身もついついその年の世相を表す一字に思いを巡らせ考えてしまいます。“平成”最後にまつわる漢字なのか、それとも政治に関わる漢字なのか…今年にはスポーツ界の根底を揺るがすニュースも多く報じられたのでそれに関する漢字なのか…。多くの人が一番関心を持った出来事は何なのか発表を心待ちにしたいと思います。

2018年を振り返り、個人的に私が注目したことは、日本社会の中でも障がい者雇用についての話をよく耳にしたことと、本屋に行くと、多種多様な大人の発達障がいに関する内容本をよく目にしたことです。発達障がいに関する理解は年々少しずつ理解も深まりつつあり、テレビでは大人の発達障害をテーマにしたテレビドラマもみられるようになりました。以前は刑事ものや探偵ものなど、主人公が事件解決に向けて得意分野の知識を発揮するドラマが主流でしたが、今年は医療や教育の分野で活躍するドラマが見られ、とても嬉しく思いました。嬉しく思えたのは、20年前に見た「アルジャーノンに花束を」という舞台を観劇したときです。人それぞれに得意・不得意があり、不得意な部分も個性の一つとして理解しあい、関わりながら仕事ができることと、喜怒哀楽の感情の交流はどう理解しあえれば、お互いが心地よく生きることができるのかを痛切に考えさせられました。その思いを心の片隅にずっと持ちながら生きてきたので、そのテーマの道しるべになるかもしれないドラマがテレビで流れていることに感銘を受けました。そういう光景が日常的に自然に見られる世の中でありたいと願い、保育園でももっと何ができる、子どもの困り感・大人の困り感に耳を傾け考え続けたいと思います。

事務室の窓から(不定期コーナー)

～他府県のシンポジウムに参加してきました～

事務室 一森すすえ

今年もあとわずかとなりました。職場の先輩のすすめもあり、先日有給を取って、障害のある娘(19歳)と一緒に他府県の大学で行われたあるシンポジウムに参加しました。私がアトム共同保育所保護者時代の保護者(その大学の職員)がファシリテーターを務められていました。企画内容もよく考えられていて、発表者の障害を持つ学生2名の話がお涙頂戴の内容でもないのに、胸に迫って涙をこらえるのが精いっぱいでした。一人は全身の筋力が極端に少なく首を支えていることもできません。90分の授業をすべて受けることができず、30分は別室で横にならなければなりません。それを様々な工夫をしてどのように周りの助けを借りながら4年間続けて来られたかという内容でした。当たり前に入學を許可したこの私立大学の取り組みも勉強させられることばかりでした。

もう一方は、見た目にはわからない障害、自閉症スペクトラム障害(ASD)を2回生の前期に診断され、今までの生きづらさに納得すると同時に、自分からカンファレンスを行って周りに伝えることで協力を得る選択をし、学生生活を送ったことを発表されていました。具体的に何に困ったか、どこを支援してほしいのか本人の口から語られていたのが驚きでもありうなずくことばかりでした。関係職員のみなさん、自分と同じような見た目にはわからない障害で苦しんでいる後輩たちに気付き、話しやすい環境を作り、どうか支援してくださいという言葉に会場から拍手が起こりました。シンポジウムは昨年障害を持ちながらその大学を卒業して社会人になった別の二人の方からのビデオレターで近況が報告されました。この大学は「障がい者差別解消法」が施行される何年も前から「共生のキャンパスづくり」に取り組んでこられたことがわかりました。なんて素敵空間なのだろうと思いました。

最後に事務局長さんが、こう締めくくられました。「多様な人間が過ごすこの社会ではその違いから争うこともあるだろう、しかし我々は傍観者になってはいけない」。充実した有給休暇でした。

2019年もよろしくお祈りします。